

(財)和歌山県文化財センター年報

2002



財団法人 和歌山県文化財センター



1. 柏原遺跡 弥生時代の方形周溝墓



2. 終戦直前に構築されたトーチカ



3. 粉河寺大門 竣工全景



4. 熊野那智大社 第一殿から第五殿（北東から）

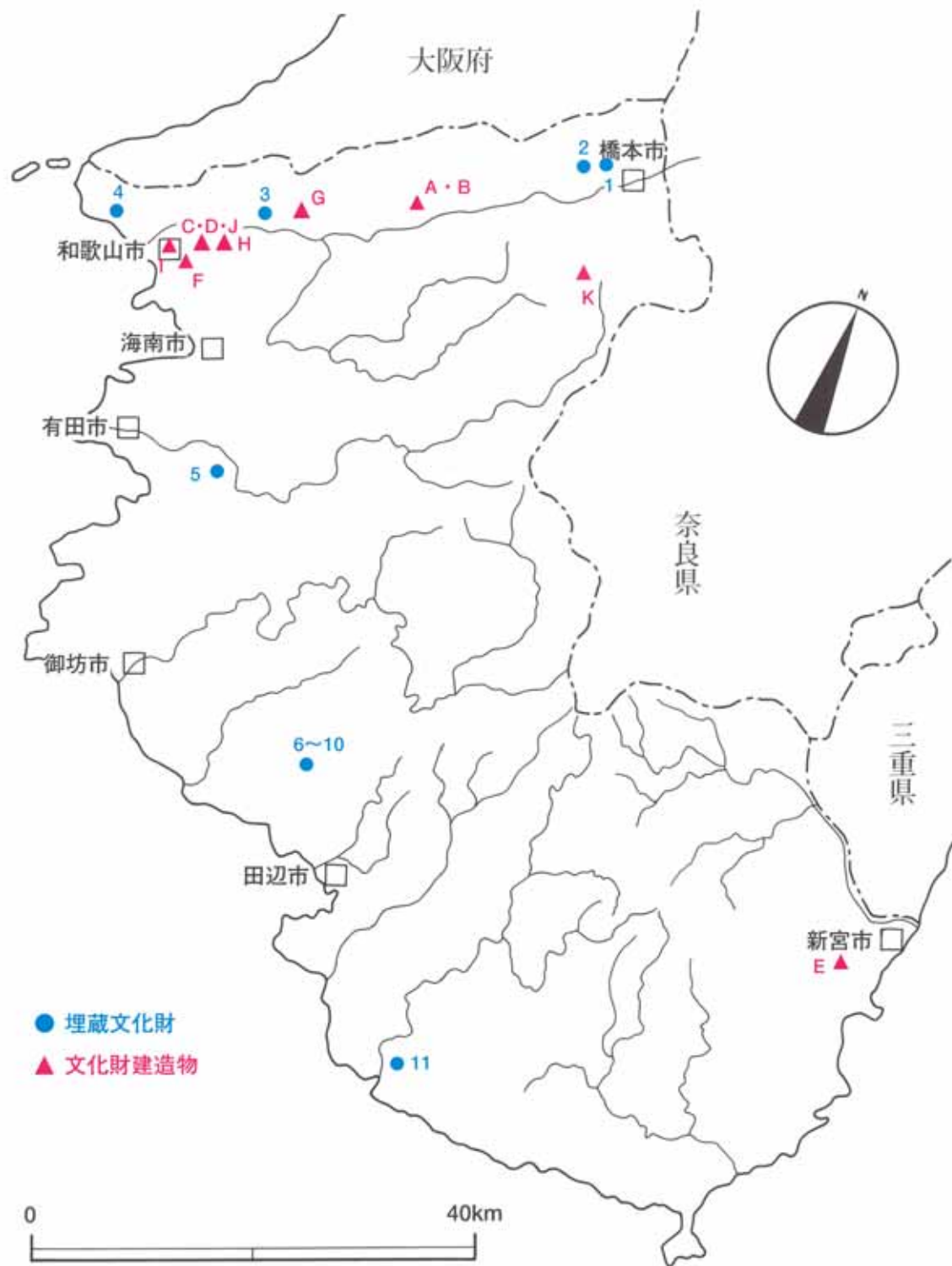
平成14年度 (財)和歌山県文化財センター受託事業一覧

埋蔵文化財発掘調査事業

	事業の名称	所在地	契約期間	面積	委託機関
1	一般国道24号橋本道路北馬場遺跡第3次発掘調査	橋本市	14.4.26~14.8.31	520㎡	国土交通省 近畿地方整備局
2	一般国道24号橋本道路柏原遺跡発掘調査	橋本市	14.8.5~15.3.20	3,540㎡	国土交通省 近畿地方整備局
3	県道紀伊停車場田井ノ瀬改良工事に伴う田屋遺跡第2次発掘調査	和歌山市	14.8.20~15.2.28	1,818㎡	和歌山県
4	西脇山口線道路改良工事に伴う西庄遺跡第7次遺物整理及び磯の浦古墳群発掘調査	和歌山市	14.7.2~15.3.31	197㎡	和歌山県
5	県道吉備金屋線道路改築工事に伴う石ヶ谷遺跡発掘調査	吉備町	14.12.16~15.3.20	975㎡	和歌山県
6	県道上富田南部線道路改良工事に伴う大塚遺跡発掘調査	南部町	14.5.14~14.10.31	2,399㎡	和歌山県
7	国道424号線道路改良工事に伴う徳蔵地区遺跡発掘調査	南部川村	14.10.2~15.1.31	544㎡	和歌山県
8	県営排特南部南部川地区高田土居城跡発掘調査(古川支線)	南部町	14.10.10~15.3.31	202㎡	和歌山県
9	熊岡遺跡(村道熊岡高原田線)発掘調査	南部川村	14.6.18~14.10.31	230㎡	南部川村
10	黒潮フルーツライン区域農用地整備事業平成14年度南部平野区画整理工事に係る埋蔵文化財発掘調査(*南部荘園関連発掘調査)	南部町 南部川村	14.6.3~14.8.9	1,014㎡	緑資源公団
11	安宅本城跡発掘調査	日置川町	15.1.31~15.3.31	86㎡	日置川町
12	西脇山口線道路改良工事に伴う西庄遺跡第6次遺物整理	和歌山市	14.4.8~14.6.30		和歌山県
13	徳蔵地区遺跡出土遺物整理	南部町 南部川村	14.5.1~15.3.31		日本道路公団 関西支社
14	藤倉城跡・川関遺跡出土遺物整理	那智勝浦町	14.5.1~15.3.31		国土交通省 近畿地方整備局
15	和歌山県緊急雇用創出特別基金事業出土遺物整理	清水町 川辺町	14.10.8~15.3.31		和歌山県

文化財建造物設計監理事業等

	事業の名称	所在地	契約期間	棟数	委託機関
A	重要文化財 粉河寺大門口保存修理設計監理業務	粉河町	14.4.1~14.9.30	1棟	宗教法人 粉河寺
B	重要文化財 粉河寺本堂及び千手堂保存修理設計監理業務	粉河町	14.5.1~15.3.31	2棟	宗教法人 粉河寺
C	重要文化財 旧中筋家住宅保存修理設計監理業務	和歌山市	14.4.1~15.3.31	6棟	和歌山市
D	重要文化財 旧中筋家住宅主屋ほか5棟保存修理に係わる修理修復業務	和歌山市	14.4.1~15.3.31	6棟	和歌山市
E	重要文化財 熊野那智大社第一殿他7棟保存修理設計監理業務	那智勝浦町	14.7.1~15.3.31	8棟	宗教法人 熊野那智大社
F	紀伊風土記の丘重要文化財民家等修繕設計監理	和歌山市	14.11.15~15.3.20	1棟	和歌山県
G	県指定文化財 荒田神社本殿保存修理設計監理業務	岩出町	14.4.1~15.3.31	1棟	宗教法人 荒田神社
H	市指定文化財 光恩寺庫裏保存修理設計監理業務	和歌山市	14.4.1~14.9.30	1棟	宗教法人 光恩寺
I	史跡 和歌山城御橋廊下復元実施設計業務	和歌山市	14.7.11~15.3.15		和歌山市
J	旧中筋家住宅未指定建造物調査業務	和歌山市	14.6.17~14.12.20	1棟	和歌山市
K	ミュージアムKOYASAN秋季文化財探訪の文化財特別公開の解説事業	高野町	14.10.26~14.10.27		和歌山県



受託事業所在地

かせばら 柏原遺跡の発掘調査

柏原遺跡は橋本市柏原に所在し、紀ノ川の支流である山田川の西岸に位置する。周辺は、北から南に向かってゆるやかに下降する平野部である。遺跡の東西には比高差30m前後の丘陵が南北方向に横たわる。今回の調査は、一般国道24号橋本道路（京奈和自動車道）の建設工事に伴って実施したもので、過去には1995年度に道路改良工事に伴い橋本市教育委員会によって調査が行われており、弥生時代及び中世の遺構と遺物が見つかった。

調査前の状況は宅地及び水田・畑地である。調査対象地は4箇所に分かれるため、西から順に1～4区と呼称した。以下、最も調査面積の大きい1区で検出した遺構を中心にその概要を記す。

第1遺構面で検出した遺構には、ピットや溝の他、多数の円形を呈する土坑がある。土坑の規模は、直径1～1.5m前後のものが最も多いが、小さいものでは0.4m前後のものも見受けられる。深さは最も残りの良いもので0.7～0.8m前後が遺存している。土坑の多くは側壁に黄色の粘土を巡らせ、床面にも同様に粘土が貼られている。また、数基では床面の外周が凹状に窪んだものや、側壁にタガの痕跡と思われる凹状の窪みが数条周っているものがある（写真右上）。土坑内には岩塊や礫及び瓦が多量に含まれており、おそらくは、これらの土坑が放棄される際に投げ込まれたものであろう。また、構造は上記の土坑と基本的には同じであるが、焼土塊や金属の溶融片及び溶融片が融着したスサ入りの赤化した炉体（？）の壁片が多量に出土する土坑が1基あり、東



1区・2区（航空写真・上が北）

壁面は赤く焼け締まり、その外側は還元し青灰色化している。これらのことや、近辺から鋳型が数点出土していることなどを考え合わせると、これらの土坑群は鋳造に関連した遺構であると判断してよいであろうが、どのように使用されたかは不明である。時期は、土坑内から出土した陶磁器等から、18世紀後半から19世紀前半と判断される。文献によれば、柏原には14世紀代から18世紀の初頭まで鋳物師が工房を営んでいたとの記録があるが、工房跡と推定されているのは今回の調査地から北へ約400mの場所である。今回検出した遺構が文献に記された鋳物師集団とどのような関係にあるかは今後の課題である。

第2遺構面で検出した遺構は大きくは弥生時代と中世の2時期に分けられる。弥生時代の遺構には、方形周溝墓・竪穴住居・土坑・溝がある。中世の遺構は掘立柱建物・土坑等である。弥生時代の遺構は、出土遺物から、何れも中期中葉と考えられる。中世の遺構は、鎌倉時代が主で、一部室町時代のものがある。方形周溝墓（巻頭図版）の墳丘部は、東西が約9.5m、南北は約8mである。埋葬施設は検出できなかった。周溝の幅は1.9～3.2m、深さは0.4～0.7mで、埋土中には多量の礫が含まれている。また、南西隅の一部を掘り残して陸橋部としている。周溝からはコンテナ約4箱分の土器が出土し、東辺及び西辺からの出土量は南北辺に比べて多い。また、所謂生駒西麓産の土器が全体の20～25%を占めている。竪穴住居は2軒を検出した（写真右下）。共に円形を呈し、規模は直径約6.3mと5.4mで、深さは各々0.5mと0.2mである。中世の掘立柱建物は3棟を確認し、内1棟は総柱の建物である（写真右中）。

第3遺構面で検出した遺構は、小規模な土坑数基とピットのみである。時期はその殆どが弥生時代に属すると考えられるが、一部は飛鳥時代のもものも含まれている可能性がある。（井石 好裕）



土坑（近世）



掘立柱建物（中世）



竪穴住居（弥生時代中期）

北馬場遺跡の第3次発掘調査

本年度の調査は平成11年度調査地に隣接する台地の北端に当たる民家立退き跡である。

調査はまず機械掘削により遺構面まで下げた。調査面積は約437㎡で、二面の遺構面を検出した。上層の遺構面は畑地の床土直下の黒褐色の中世包含層上で確認した。検出遺構は掘立柱建物と土坑状遺構であり、出土遺物（瓦器・土師器皿）から鎌倉時代後期と考えられる。柱穴は多数検出したが組み合う掘立柱建物は3棟だけであった。3棟ともに間尺は7尺であった。建物1は東西2間×南北3間以上、掘方は直径0.3～0.4mの円形で最も深いもので0.5mを測る。建物2は東西3間×南北2間である。これの東側には庇と考えられる柱穴を検出した。建物3は東西2間南北3間以上の建物で、建物1と平行に並ぶ。また、建物2とは重複するが、柱穴の重複関係が認められないため、建物の新旧が不明である。下面の遺構は第3層包含層除去後、整地土と考えられる土層上で確認した。検出遺構はわずかながらの柱穴と土坑状遺構を検出した。しかしながら、これら下層で検出した遺構からの出土遺物は皆無であった。

2ヶ年の既往の調査において縄文時代の土坑状遺構、弥生時代の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物、中世の掘立柱建物・土坑状遺構等を検出している。しかしながら、本年度は縄文時代から奈良時代までの遺構が検出されなかったが、今回検出した中世の包含層中に多数の須恵器が混在していたことを考えると、中世のある時期にこの台地の縁辺部が大きく改変されたと考えられる。今後本調査で検出できなかった縄文時代から奈良時代の遺構検出の期待がもたれる。（佐伯 和也）



上面遺構全景（東から）

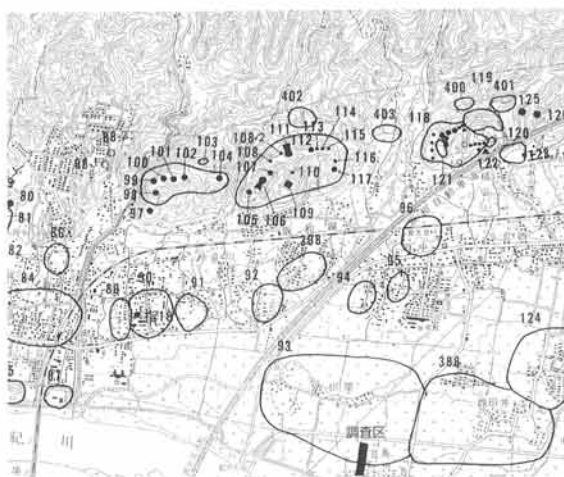
田屋遺跡の第2次発掘調査

本調査は、県道紀伊停車場田井ノ瀬線道路改良工事に伴う発掘調査で、1,818㎡の調査を実施した。田屋遺跡は、一般国道24号バイパス線建設工事に先立ち1981～85年に実施された発掘調査で弥生時代後期から古墳時代中期にかけての住居跡多数のほか、縄文時代の土坑、中世の掘立柱建物等が検出された。さらに、昨年度センターが945㎡の発掘調査を実施し、古墳時代前期の竪穴住居1、奈良時代から中世に機能した流路2、溝6、中世後半の畦畔状遺構などを検出した。また、周囲には本遺跡同様、弥生時代から古墳時代の住居跡が発見された北田井・西田井遺跡などが所在する（第1図）。

調査成果 本調査は1～6調査区を設定し、調査を実施した。県教育委員会の試掘調査等の結果、1調査区は昨年度調査区の南側の隣接した位置に、2～6調査区は1調査区から南80mの位置に設定した。排土置場の関係から2～4調査区と5・6調査区は反転して調査を実施した。

1調査区では150㎡の調査を実施し、地山上面で住居跡とみられる遺構1、溝11以上、土坑4等を検出した（写真1）。溝11以上のうち7条は、N-30°-Eの方向性を保持して平行する。溝からは、「て」字状口縁の土師器皿が出土し、帰属時期は10世紀前半とみられる。住居跡とみられる遺構は調査区北端で検出したが、調査区外へ延びているため、平面プランは判明しない。規模は、南北長2.55m以上、東西長3.45m以上を計り、昨年度検出した住居跡同様、壁溝・柱穴は検出されなかった。覆土中からは、竈の部材とみられる粘土塊・焼土塊を検出したが、原位置は保持していない。

2～6調査区では1,667㎡の調査を実施し、遺構は3層上面と4層上面で検出した。3層上面では、井戸2、溝10条以上、柱穴、土坑多数を検出した。溝や井戸からは、土器片や瓦片などとともに一石五輪塔・宝篋院塔基礎・地藏仏などの石造物が出土し、出土遺物から3層上面の遺構群は近世末までの帰属とみられる。また4調査区東端で検出した溝には、石垣状遺構や土留機能をもつとみられる板材を杭で固定した遺構等が発見され、6度以上の浚渫が行われたことも確認できた。



第1図 調査区位置図 (S=1/50,000)

93.田屋遺跡 124.北田井遺跡 388.西田井遺跡

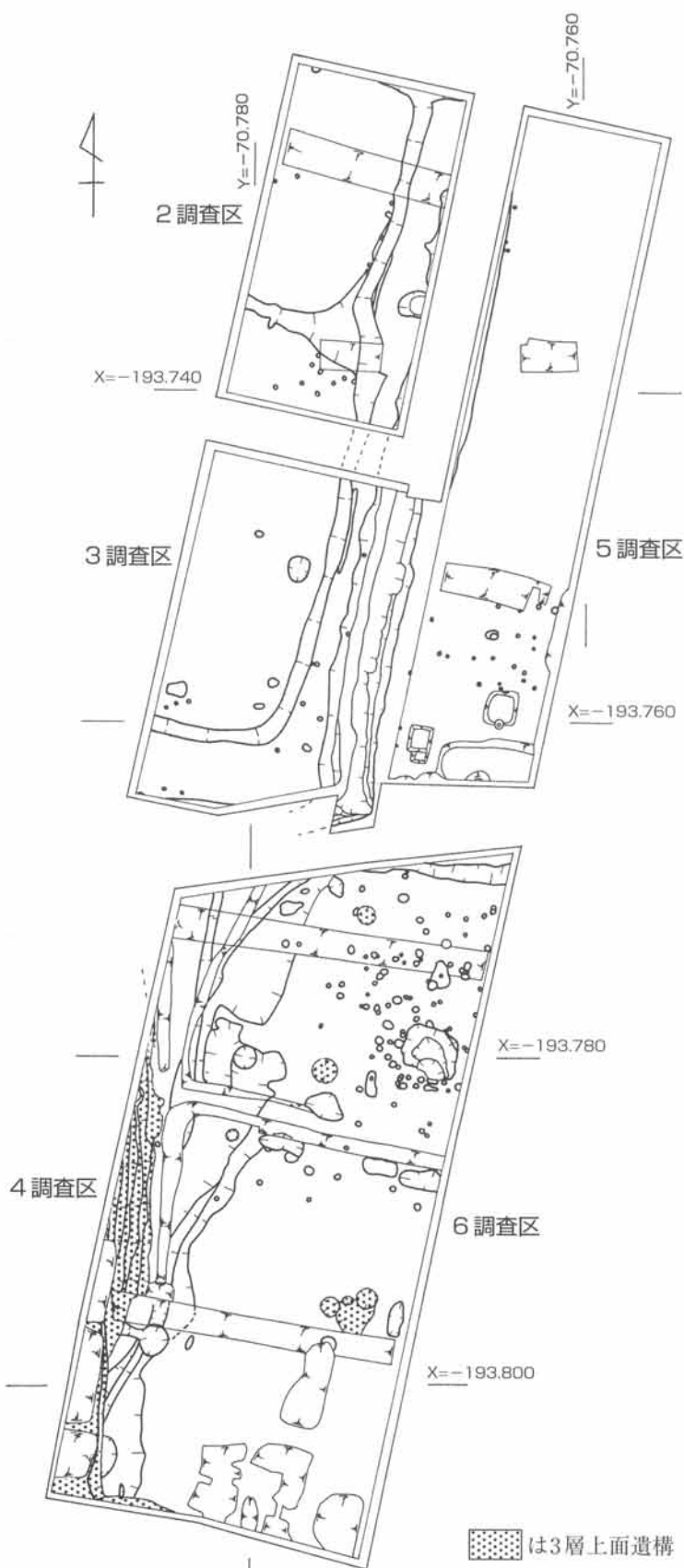


写真 1 調査区完掘状況

4層上面では、柱穴・土坑・溝・落ち込み状遺構・不整形土坑などを検出した。多数検出した柱穴は、明確に建物としてまとまらなかったが、柱穴の中には礎石を配するものを含む。2・3調査区では、 $N-15^{\circ}-E$ の方向性を持ち、直角に西へ屈曲する溝20とその東側1.2~1.5mにはほぼ平行する遺構47を検出した。遺構47も溝20同様、直角に屈曲し、区画を明示するための施設と考えられる。帰属時期は出土した備前播鉢・常滑甕などから15世紀前半とみられる。4調査区では3層上面検出の溝の下層において $N-10^{\circ}-E$ の方向性をもつ4層上面に帰属する溝を検出した。この溝は、先述の溝20・遺構47同様、区画を示すものと考えられる。この区画は、4・6調査区で検出した遺構の状況から調査区の西側に区画の内側が展開すると予想され、その性格は3層帰属遺構出土石造物に表れる仏教関連遺物や4層帰属遺構出土の多数の瓦片などの存在から、寺院関連の施設の可能性が推測される。

なお、2~6調査区の大半は従前の田屋遺跡の範囲外に位置し、先述のとおり遺構の性格も従来の田屋遺跡や1調査区の調査成果と大きく異なることなどから、2~6調査区検出の遺構群は周知の田屋遺跡とは異なる遺跡を形成すると考えられる。

(藤井 幸司)



第2図 第2~6調査区遺構概略図S=1/500 (座標値は旧座標)

磯の浦古墳群の発掘調査

磯の浦古墳群は和歌山市磯の浦から本脇にかけて点在する古墳群である。今回の調査は都市計画道路西脇山口線の道路改良工事に先立つもので、磯の浦3号墳の発掘調査のほか、磯の浦4号墳想定地点の確認調査（Dトレンチ）、菖蒲山尾根筋における古墳等の所在確認調査（A～Cトレンチ）を実施した。また、調査対象地内において、第二次世界大戦時のトーチカと坑道を確認した。調査期間は平成15年1月7日から2月28日まで、発掘面積は197㎡である。

磯の浦3号墳は菖蒲山の東に派生した山の中腹にあり、標高は約26m。主体部周辺は墓地・参道への改変・撤去等の影響により墳丘・周溝は確認できず、僅かに残存した北小口の板石と墓壙から、2.0m×0.6m以下の箱式石棺か竪穴式石室があったものと推定される。攪乱土からは、管玉が2点出土した。また、地元の神社には昭和38年に出土した鉄刀と勾玉、須恵器が保管されている。従来、磯の浦4号墳が想定されていた地点では、遺構・遺物は確認されなかった。

このほか、3号墳から約35m西の地点で、終戦直前に築造されたトーチカを確認した。幅・奥行き3.5m、高さ3.4mのコンクリート製防禦陣地で、内部へは約50mのトンネル状の坑道を通じて入る構造であった。北西約1.6kmに構築中であったカノン砲陣地を守るための陣地の1つで、内部に軽機関銃を据えて粉河加太線方向を側射する目的で造られたものと考えられる。

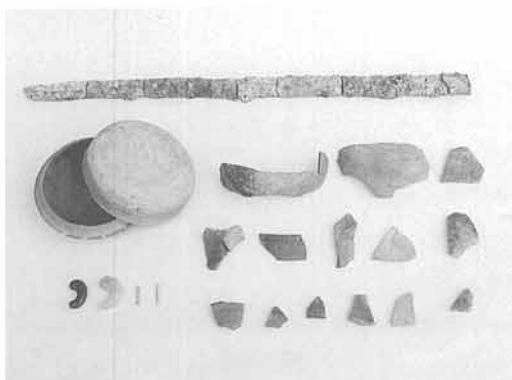
なお、詳しくは既刊の報告書（『磯の浦古墳群』）を参照していただきたい。（丹野 拓）



調査地の位置



調査区の設定状況



磯の浦古墳群出土品（伝世品含む）



トーチカ内部

石ヶ谷遺跡の発掘調査

石ヶ谷遺跡は吉備町西丹生図に所在する。この辺りは、有田川南岸の河岸段丘に当たっており、標高は調査地付近で約40mである。

今次の調査では、中世の屋敷地、およびこれに伴う建物・溝・井戸などを数多く検出することができた。出土した遺物から見て、当地に人々が住み始めるようになるのは鎌倉時代、13世紀中頃から後半にかけての時期と言えよう。この時期の遺物が最も多いことから盛況を呈したのもこの時期であり、溝19で東を限り、溝16で北側を画して屋敷地としたものと思われる。建物も柱穴の数から推して複数棟が同時期に並存しており、かつかなりの頻度で建替えがなされたことが窺われる。その後14世紀に入ると遺跡は一時途絶えるか規模をかなり縮小し衰退していたことが考えられる。再び活況を呈するのは15世紀に入ってからで、この時期に溝13・14などで敷地の細分がなされたものと思われる。井戸20および井戸30などもこの時期に掘られた可能性を考えている。また墓の可能性を考えた土坑9もこの時期であろうし、屋敷地の中にあることから、“屋敷墓”と言われるものになるであろう。

15世紀に入って活況を呈したこの遺跡は、出土遺物から見ると15世紀の後半（第4四半期）段階で再度途絶、もしくは衰退しているようである。

調査の成果から遺跡としての東西の範囲は極めて狭いものであり、中世の一般集落とは考え難い状況である。吉備町史を紐解いてもこの地にこの時期何らかの施設があったとの記載はなく、そのほかにも該当する記録類はいっさい残っていない。ただ、地元の伝承として尼寺があったと伝えられており、現にその系譜をひくものか否かは不明であるが、当遺跡の南側の山麓には地藏堂が現存していて地元民の信仰を集めている。

こうしたことから、ひとつの可能性ではあるが、当調査区の南側に中世の寺院が営まれており、今回検出した屋敷地はその寺院に付属する施設ではなかったかと思っている。（村田 弘）



区画溝に囲まれた屋敷地



井戸20



石ヶ谷遺跡遺構概略図

大塚遺跡の発掘調査

発掘調査地点は、図1に示したように南部町東吉田地内の交差点付近であり、この付近は遺跡の多い南部町の中でもとりわけ密集する地点で、近年の発掘調査で縄文時代中期の大規模な集落跡が確認された徳蔵地区遺跡の南東に隣接している。

今回の調査では、上層遺構として③b区を中心に径1.2m前後、深さ80cmほどの土坑を20余基確認したが、これらの中には周囲および底面を厚さ5cmほどの漆喰によって固めているものもいくつかある。また、これらの土坑に隣接して複数の甕が埋設されていたと思われる遺構も検出している。この埋甕遺構と前述の円形土坑とはセットとして機能していた可能性が高いものと考えられ、両者とも出土した遺物から近世後期（19世紀）、それも限りなく幕末に近いもので、鍛冶・鑄造関係の施設の一部ではなかったかと考えている

③区下層および②⑨区では竪穴住居址9棟を検出した。このうち7棟は方形の住居址であり、いずれも出土遺物から古墳時代前期（4世紀）のものと考えられる。残りの2棟は円形を呈するもので、その形状から推して古墳時代以前のものである可能性が高いが、出土遺物が少なく時期については明確にできなかった。

大塚遺跡のこれまでの調査でもこの時期の住居は数棟確認されているが、大部分はこの時期より少し前の古墳時代でもごく初めの頃のものであった。今回の調査結果から、大塚遺跡では古墳時代の初頭に集落が営まれはじめ、その後も順調に集落が維持されていたことを物語るものと言えよう。なお、この方形の竪穴住居の一棟（SB-718）から陶質土器が出土している。器形としては壺で、口縁部には二条の凸帯と波状文が巡らされている。陶質土器については、これまで県内において紀ノ川筋を中心として何例かの出土が知られているが、本例のように古墳時代前期に遡るものは少なく、また、南部という畿内中心部から離れた遠隔の地で確認されたことの意義は大きいと言えよう。

（村田 弘）

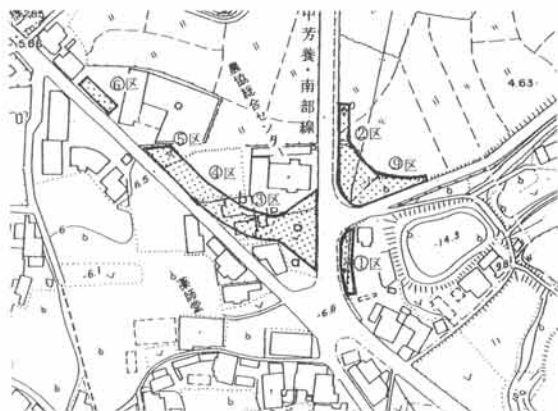
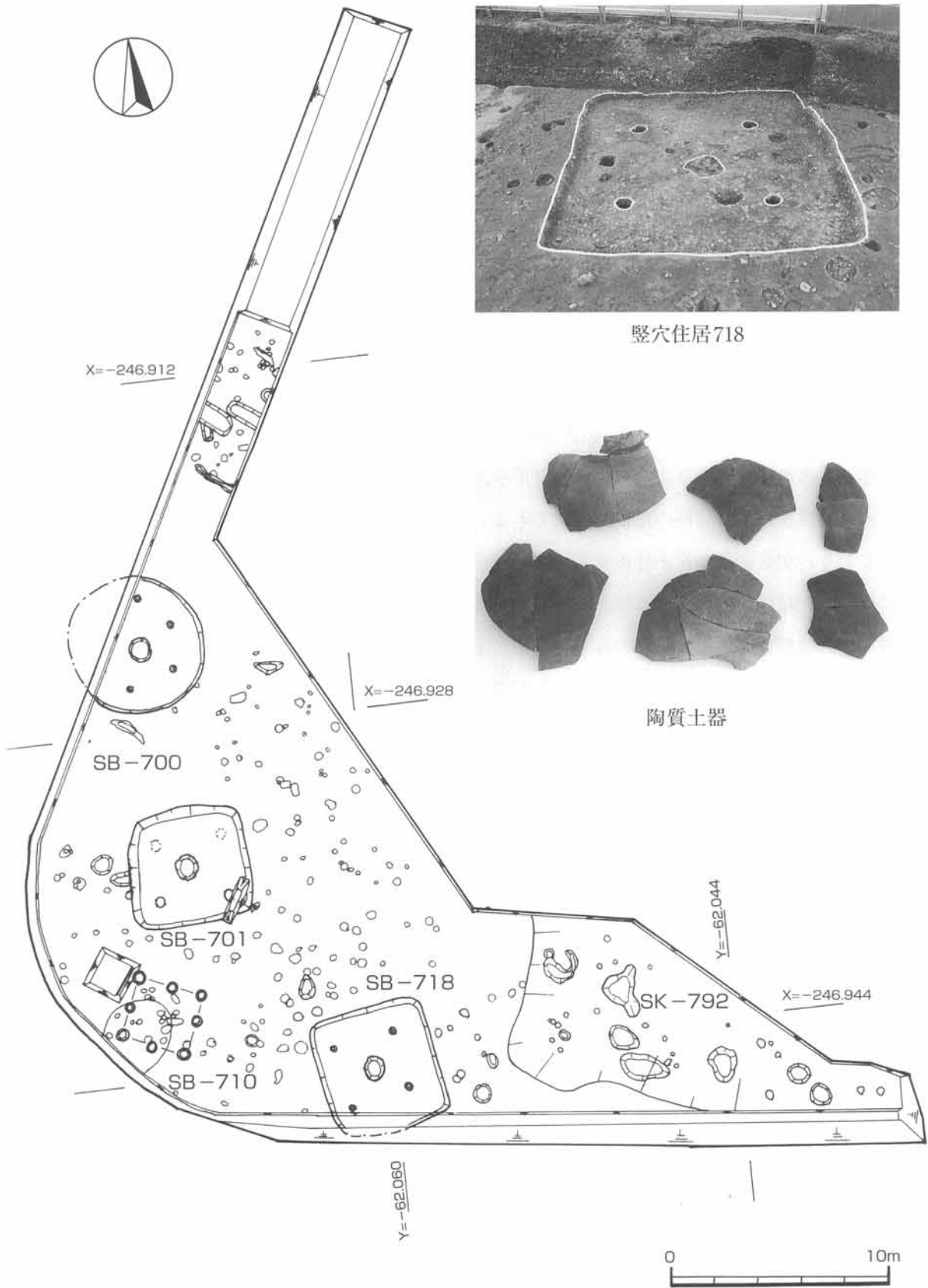


図1 調査区位置図



③b区 埋甕遺構と円形土坑



②・⑨区遺構概略図

国道424号道路改良工事に伴う徳蔵地区遺跡の平成14年度発掘調査

調査地は日高郡南部川村徳蔵字齋藤に位置する。大塚遺跡の所在する丘陵地から続く微高地の縁辺付近と考えられ、徳蔵地区遺跡の西端にあたる。近畿自動車道南部インター（仮称）のアクセス道路整備の一環として、国道424号線の拡幅が計画され、発掘調査を実施する事となった。調査は南からB2区、B1区、A区の順に実施した。調査期間は平成14年10月28日から12月9日まで、発掘面積は544㎡である。

A区は西辺約20m、南辺約11mの台形に近い形状の調査区で、旧地形は北東から南西に降る緩傾斜地である。近世、中世、縄文時代晩期の遺構面の調査を行った。調査の結果、近世の牛の足跡、中世の杭列、縄文時代晩期と推定されるピット状の遺構等を確認した。

B区は幅約11m、長さ約38mの調査区であるが、用水路により東西に分断されている。南には褐色土の遺構面があり、北には自然河川が流れる状況を呈していた。遺構面には縄文時代晩期と古墳時代後期の2時期の遺構が確認できる。縄文時代晩期の遺構としては土坑・ピットを検出しており、突帯紋土器片が伴出する。古墳時代後期の遺構としては底部を打ち欠いた甕を正位置に据えた土坑のほか、同様の埋土で埋まる掘立柱建物跡等を検出した。調査区北半の自然河川は古墳時代後期以前に埋まっているが、湿地のままであり排水用の溝が掘られている。

なお、詳細については、近日刊行予定の報告書を参照していただきたい。（丹野 拓）



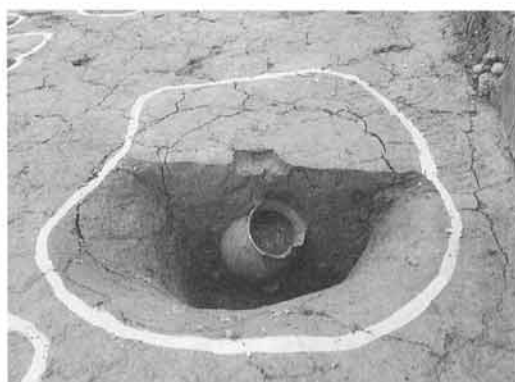
調査地の位置



調査区設定状況



B区 古墳時代後期の状況



甕を据えた土坑

古川支線改良に伴う高田土居城跡の調査

高田土居城は平成11年度に北側の外堀を、平成13年度に東と西の外堀の一部が確認されている。本調査はこの高田土居城跡の西側の外堀確認を目的とし、これらの調査成果を基に、外堀の推定ラインの屈曲地点に調査区を設け発掘調査を行った。

調査 現況は水田である。調査区は古川支線西堤に沿って3工区を設定した。北側の第Ⅰ工区は約14㎡、南側の第Ⅱ工区は約84.4㎡である。第Ⅲ工区については、第Ⅰ工区と第Ⅱ工区の調査補足確認という意味で設けた調査区である。この工区の調査面積は103.8㎡で、全体の調査面積は202.2㎡となる。第Ⅰ工区は現地盤から近代・近世の堆積土を約1.2m機械掘削により除去した。次に上層の近世土を除去後、この下で外堀埋土と考えられる遺構面を検出した。しかし、底の部分の灰色粘土の埋土だけが約50cmの厚みで残存していると考えられる状態のものであった。第Ⅱ工区は近世の水田層と思われる層を機械で除去し、次いで中世の水田層・包含層を検出し、この層を発掘後自然流路の埋土をベースに外堀と考えられる西肩の落ちを検出した。この残存の深さは約0.7m～0.9mを測る。埋土は青灰色系の粘土質であった。第Ⅲ工区の体積土の状況は第Ⅰ工区と同様で、現地盤から1～1.2m下までは近世の堆積土で埋まり、自然流路の堆積土をベースとして厚さ15～20cmの外堀の底の一部と考えられる灰色粘土を検出した。

以上、全ての工区で外堀埋土と考えられる堆積土を検出したが、調査地の地形的な観点からいうと、第Ⅰ工区・第Ⅲ工区は第Ⅱ工区とは堆積状況が異なり、第Ⅰ・第Ⅲ工区は現地形でも20～30cmも低いところから外堀跡の名残と考えるのが妥当と思われる。したがって、第Ⅱ工区で検出した外堀の埋土と考えたものは自然流路のある時期の堆積土と考えた方が自然である。（佐伯 和也）



調査位置図



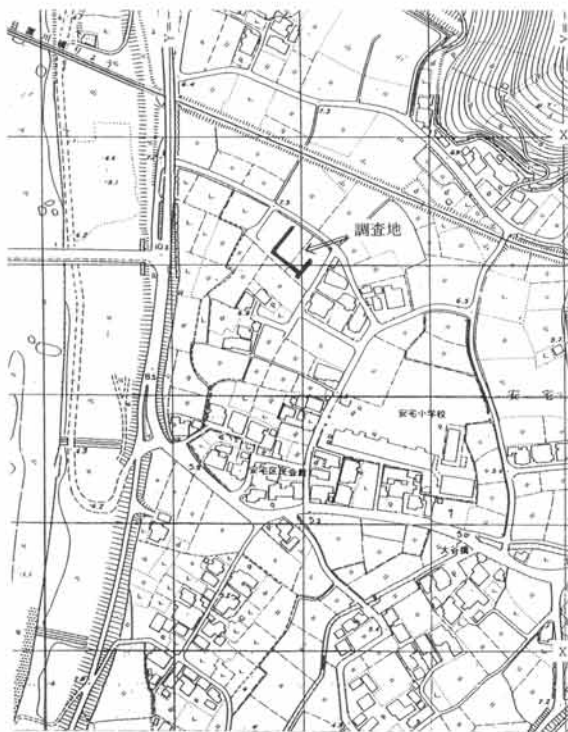
第Ⅲ工区 (北から)

安宅本城跡の発掘調査

本遺跡は日置川左岸の微高地上に位置し東は安宅川によって画されている。遺跡の標高は概ね6.0mの内外にある。安宅本城は中世に水軍領主として海上交通を支配していた安宅氏の本拠地跡である。北には詰め城と考えられている八幡山城が存在し、堀切や曲輪も想定されている。また南東には勝山城があり、この山城は標高212mと高所で、荘域および海上までも見渡せると考えられる。日置川を隔てた西向いの丘陵にも安宅氏の執事大野氏の居城とされる大野城がある。

調査 調査地は字「城の内」と呼ばれる安宅本城跡の北端にあたり、現状は休耕田である。ここに幅2mのトレンチを「L」字状に総延長68mを設定し調査を開始した。調査はまず機械掘削により現在の水田床土の下部まで慎重に除去した。これの直下は出土遺物から江戸時代と考えられる旧水田（1・2層）で人力掘削により除去した。次いでこれの除去後に安宅本城の時期と考えられる二面の中世遺構面（3・4層）を検出した。検出遺構には溝状遺構、土坑状遺構、堀状遺構、柱穴、礎石等がある。また、出土遺物には備前焼甕・壺、常滑焼甕、中国製青磁碗、山茶碗、土師器皿などがあり、概ね、遺構の時期は室町時代中頃と考えられる。検出遺構で着目すべきは西側の南北方向のトレンチにおいて幅約17mの堀状の落込み遺構を検出したことである。この遺構の上層には近世の整地土や水田層が約40cmの厚みで認められ、その下層は厚み約80cmの灰色粘土層であった。ここからは唐津焼が出土し、近世まで開口していたと考えられる。しかしながらこれを堀とするには肩部の傾斜が緩く堀の断面形状を成していないと考えられる。また地形的にもこの遺構を

境にして北は本遺跡と様相が異なり、堀とは言いがたくとも安宅本城と周囲を画する自然流路とも考えられる。近年、安宅本城とこれを取巻く山城の研究が盛んに行われているが、文献等からもこの城の堀に関する記述は見い出せず、今後の調査に期待される。（佐伯 和也）



調査位置図



調査地（南東から）

徳蔵地区遺跡第1次出土遺物整理

本年度から調査報告書の刊行を目指した本格的な整理作業に着手した。今次の整理業務の対象となったのは、近畿自動車道松原那智勝浦線の内の御坊～南部工区に該当する発掘調査により得られた徳蔵地区遺跡の出土遺物等である。

調査により得られた出土遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・溶解炉等の焼き物を始め、多量の木製品・石製品・金属製品などがある。出土遺物の多くは、縄文時代中期・後期の集落跡から出土した縄文土器・石器、縄文時代晩期～弥生時代前期にかけての旧河川の堆積土から出土した縄文土器・弥生土器・石器と、高田土居城跡北外郭部から出土した室町時代の土師器・瓦質土器・陶磁器類である。その他、旧河川から木製農具と多量の杭材が、高田土居城跡の外堀から土留め材や橋脚の材などの木質遺物が出土している。

整理作業の内容として、土器類では主に注記作業・土器の分類と収納・接合作業・石膏復元作業・実測作業・遺物実測図の整理・台帳登録・実測遺物収納コンテナの整理を、木製品・金属製品では台帳登録カードの作成・実測作業を、石器類では台帳登録作業を行った。その他、調査報告書の作成に伴い、現地調査により得られた写真のアルバム収納作業に伴う記録記載の再確認と補足・遺構図面収納作業に伴う記録記載の再確認と図面台帳の完備、併せて、出土遺物登録台帳・土器の遺物実測図登録台帳・遺構図面登録台帳類のパソコン入力作業をも行った。

(土井 孝之)



木製品の実測作業



土器の石膏復元作業

藤倉城跡・川関遺跡第1次出土遺物整理

藤倉城跡・川関遺跡の発掘調査は平成10年度～12年度にかけて、東牟婁郡那智勝浦町中村・川関の高速道路建設予定地で22,054㎡が実施された。藤倉城跡は戦国時代末期から近世初頭まで存続した城館跡で、堀切や石垣などで構成された山城部と、麓の谷間に築かれた館部がセットで調査された。川関遺跡は藤倉城跡前面の水田部に存在し、平安時代から室町時代にいたる集落跡が確認された。80棟以上の掘立柱建物や多数の井戸・溝・土坑などが検出された。

整理作業は今回が初年度で、平成14年6月から平成15年3月にかけて、海南整理事務所で、洗浄・注記・分類・接合・復元・実測・台帳作成等の作業を実施した。

藤倉城跡では、瀬戸美濃・志野・唐津・備前などの国産陶器と、中国や朝鮮、タイやベトナムなどの陶磁器が多数出土した。土器は17世紀第1四半期のものが多いが、第2四半期と考えられる砂目痕をもつ唐津皿や瀬戸美濃白天目茶碗なども少量みられ、城館の廃絶時期がやや下る可能性が生じてきた。瀬戸美濃系土器の個体数は約380点で、天目茶碗が約29%、志野丸皿が約27%と高い比率を占める。唐津系土器の個体数は約210点で、皿類が約53%、茶碗類が約22%、向付が約14%である。香炉は8個体確認された。他に、茶臼や葉茶壺に使用された可能性があるタイ・ノイ川窯系四耳壺なども出土しており、茶道と香道関連の遺物が多い。

川関遺跡では、東海地方の山茶碗が多数を占める。中国製の青磁・白磁も多くみられ、青白磁製の合子も6点出土している。山茶碗の外表面底部には「圓教房」・「乗禅」・「上料」・「黒犬」・「いぬみや」・「たき」・「廊」・「十」などの墨書がみられるものがある。 (黒石 哲夫)



タイ製四耳壺



備前大甕の復元作業

重要文化財 旧中筋家住宅主屋ほか5棟保存修理の設計監理

旧中筋家住宅の保存修理事業は平成12年2月から98ヶ月の事業期間ではじまり、3年と1ヶ月が経過した。平成12年度は各建物の素屋根などの仮設工事及び長屋蔵の解体着手。13年度は、長屋蔵については解体を完了させ、コンクリートによる基礎工事などを行った。他の建物は屋根までの解体を終えた。

今年度は、長屋蔵・北蔵については現状変更の許可を受け、それに基づく実施設計を行い、工事を進めていった。長屋蔵は軸部・小屋組等の組立て、大屋根及び庇の屋根葺き工事、左官工事では荒壁付けを行った。北蔵は、不陸の調整、置屋根の補修、屋根葺き工事を行った。この2棟は、周辺の整備などを除いて15年度中には完成する予定である。

また、主屋・表門の建立や修理の変遷を明らかにし復原の資料とするため、2棟の床の解体を行うとともに、主屋・表門間、主屋の四方にトレンチを設定して発掘調査を行った（調査は（財）和歌山市文化体育振興事業団が実施）。当初この2棟は、軸部がほとんど修理されていないと考えていたが、床下については大規模な修理が施されていることが判明した。このため主屋・表門の修理の過程を明らかにする必要性が生じ、また名古屋で中筋家の文書が新たに発見されたので、今年度に予定していた文化庁への現状変更許可申請を次年度に繰り延べざるを得なくなった。

この他にも別件の受託業務であるが、見学者用の便所に建て替えられるため取り壊される未指定の風呂・便所の調査を行い、調書・図面及び写真などの記録作成を行った。（寺本 就一）



長屋蔵の軸組・小屋組の組立完了



長屋蔵の屋根葺き完了



北蔵の屋根葺き工事



風呂・便所

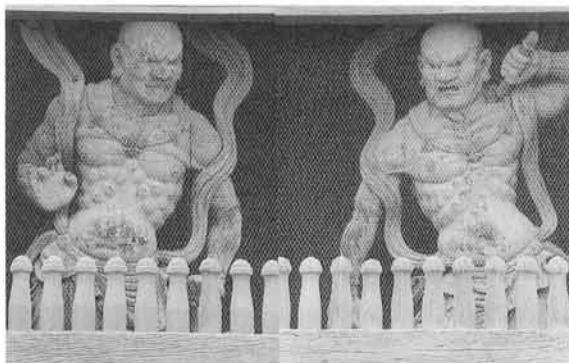
重要文化財 粉河寺大門保存修理の設計監理

粉河寺大門の保存修理事業は、平成10年10月から48ヶ月の計画で行われていたが、今年度は雨落ちほか整備工事を行い、すべての工事を完了した。

粉河寺は宝亀元年（770）の創立で、火災や兵火に遭いながらも幾度も再建され、現在の大門は宝永4年（1707）の建立である。

築後約300年を経て傷みも目立ってきたため、今回は、伝統的な木造技術に加え、鉄骨による補強など現代的な技術も取り入れながら、根本的な解体修理を行った。

粉河寺伽藍の入口に相応しい、偉容を取り戻している。
(鈴木 徳子)



大門 仁王像（右：阿形 左：吽形）
大門と同時期と見られ、仏師春日の作と伝う

重要文化財 粉河寺本堂及び千手堂保存修理の設計監理

粉河寺本堂及び千手堂の保存修理事業は、平成14年5月から11ヶ月の計画で行われ、今年度中に、すべての工事を完了した。本堂は縁廻りと亀腹、千手堂は亀腹の部分修理を行った。

本堂は、二重屋根の正堂と、前方に建つ一重屋根の礼堂が結合した大型の複合仏堂で、享保5年（1720）に上棟されているが、天井や建具など細部の施工は今もなお継続中である。昭和末から平成6年頃までに、屋根本瓦葺きと縁廻りの一部を補修した他は大きな修理もなく、軸組等は健全である。縁板は長2.2m×幅0.3～0.6m×厚10cmの大きな檜（一部は楠）の板で、往来の激しいところは摩耗し表面の凹凸が激しく、ゆるみや隙間も大きく、安全上からも早急な修理が望まれた。亀腹は、漆喰はほとんど落ち、小動物等の掘った穴も散見され、荒土まで部分的に崩落



粉河寺 本堂 全景

していた。土間叩きは硬度を失い、土埃が立つ状態であった。

千手堂は宝暦10（1760）年に上棟した建物で、昭和55年に屋根本瓦葺き等を行っているが、亀腹漆喰塗りが部分的に浮き上がり剥離していた。

今回の修理に伴う調査では、本堂亀腹がや



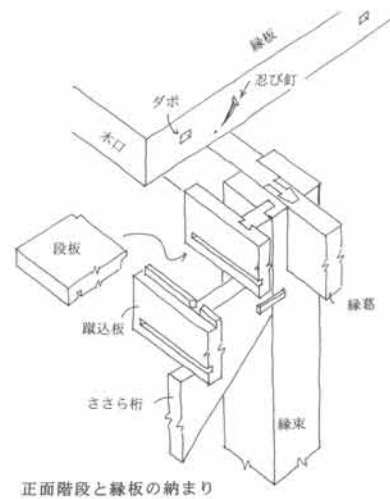
粉河寺 千手堂 全景



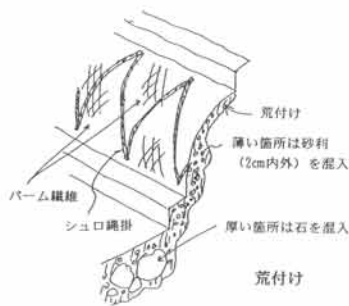
本堂 緑廻り・亀腹の詳細

や特殊な仕様であることが分かった。亀腹上端には、礎石間に漆喰塗りの帯を廻し、鼠漆喰仕上げであるため、一見すると狭間石に見える。また、亀腹下端にも同様の帯を廻すが、仕上げは赤褐色の色漆喰になっており、ここは土間の見切りでもあるので、土の様な色に着色したと想像できた。亀腹は、土の浮いた部分を掻き取り、その上に塗り重ねたので、肌別れしないよう、布海苔による木地固めを行い、またシュロ縄を巻きつけたり、スサを十分に入れるなど、丁寧な施工を心がけた。漆喰塗り仕上げは、伝統的な左官材料である貝灰、俵灰（石灰）、布海苔などを吟味し使用した。

(鈴木 徳子)



正面階段と緑板の納まり



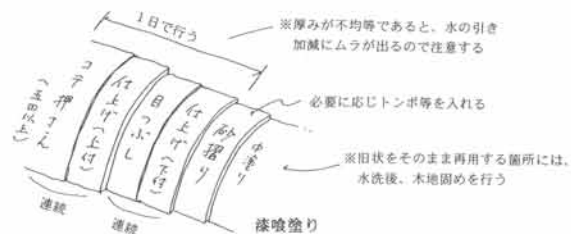
荒付け



中塗り

	俵灰	貝灰	砂類	すさ類	布海苔	油
砂 漆 喰				油すさ 0.5kg		
仕上げ	12kg	8kg	川砂	マニラ 0.5kg	1.0kg	—
下付け	12kg	8kg	寒水石	マニラ 1.0kg	0.8kg	—
同				ガラス 0.5kg		
上付け	10kg	10kg	—	紙すさ 0.5kg	0.8kg	0.72%

漆喰の配合表



漆喰塗り

本堂 亀腹の施工 概念図

漆喰塗り仕上げは、上記の通りの配合により、現場で調合して施工した。

重要文化財 熊野那智大社第一殿他7棟保存修理の設計監理

熊野那智大社は古来より名瀑・那智大滝が神聖視される紀伊半島の南端にほど近い那智山の中腹に位置し、仁徳天皇の時代に現在地に鎮座したと伝えられる。平安時代以降は修験道の霊場としても栄え、熊野本宮大社、熊野速玉大社とともに熊野三山と称され、「蟻の熊野詣で」といわれるほど参詣者を集めた。

境内地は滝から南方に1kmほど離れた山腹の北東斜面を開いた位置にある。各社殿は石垣が築かれた山側を背にし、第一殿から第五殿は東面して北から南に横一列に配され（地主神を祀る第一殿は後ろに若干さげられている）、第五殿の南東側へ矩折れに第六殿と御県彦社が北面して並ぶ。各社殿は瑞垣で囲われ正面には鈴門が開かれている。社殿が並び建つ現在の特徴ある配置構成は中世の絵巻物や曼荼羅などにも確認でき、古くからの形式であったことがわかる。

現在の社殿は第一殿から第六殿が嘉永4年（1851）から同7年にかけて再興されたことが社蔵の文書で確認でき、御県彦社は慶應3年（1867）の建立であることが金具の銘から推定される。これらの社殿と鈴門及び瑞垣は平成7年に重要文化財に指定されている。



各建物の檜皮葺屋根は前回の葺き替えから30年前後経過しているため破損が進み、また縁廻りを中心として塗装の劣化が目立ってきた。このため平成14年7月から平成17年3月までの33ヶ月の計画で、屋根の葺き替えと塗装の部分塗り替えを、重要文化財に指定されている建物全てに施行する予定である。

社殿全景（東南から）：神社所有写真帳より複写



那智山宮曼荼羅図（部分） 室町時代：神社所有写真帳より複写

事業の初年度にあたる今年は、屋根の破損が進んでいた第六殿と御県彦社の工事を施工した。

第六殿は梁間二間の八間社流造りの長大な建物で八社殿とも呼ばれている。正側面3方の切目縁の下に浜床を設けているのが特徴的で、身舎内部は内外陣に分け、外陣正面側を葦戸、西面を引違い格子戸としている。御県彦社は梁間一間の一間社流造りで4方に切目縁を廻している。他の社殿と同様に身舎内部を内外陣に分け、外陣正面側を葦戸、西面を片引格子戸としている。

それぞれの檜皮葺屋根は第六殿が昭和34年、御県彦社が昭和49年に葺き替えられており、今回は平葺全面と軒積の一部を葺き替えた。旧檜皮屋根を解体した結果、軒積や野地は予想していたよりも腐朽が進んでいたものの、小屋組などに破損はなく箱棟木部も多くの部材が再用できた。北面し背面には石垣と植栽が迫るといった悪い環境下で全体に良く維持されていたのは、台風などで屋根に破損が生じるときに小修理や植栽の剪定を繰り返してきた神社の日常の管理によるものが大きい。塗装は劣化が進んでいた縁廻りや向拝柱、破風板などを中心に、合成樹脂を使って塗り替えられていた部分を含め一旦旧塗装を掻き落とし、伝統的な工法に準じて塗り直した。



屋根工事施工の状況



塗装工事施工の状況

今回の屋根工事に伴う調査により、御県彦社の小屋組内部に「丁卯 慶應三年」(1867)と記された墨書が見つかり建築年代が確認できた。また第六殿からは昭和12年の修理棟札が見つかり、当時の内務省神社局技師の名も記されていた。第六殿の小屋組や箱棟はこの時に新しく造り直されているほか、石垣の積み直しや現在の拝殿が建設されるなど大規模な整備が行なわれたことが神社の日誌からも伺われる。当時の図面の一部が神社本庁の資料室に保管されていることが確認できており、今後資料調査を進めていく予定である。(多井 忠嗣)



御県彦社 小屋組内部墨書：右側に「丁卯 慶應三年」と読める



第六殿 修理棟札

県指定文化財 荒田神社本殿保存修理の設計監理

荒田神社本殿の保存修理事業は、本年度は、基礎を除く部分までの解体と、古材の繕いや木材の発注、基壇石の据え直しなどを実施した。

本殿は、天正年中の兵火に遭い衰微したと伝わるが、建立年代については資料が無い。ただし、内陣より発見された狛犬台座銘に、「寛永元年（1624）」に「根来平之内七郎兵衛正信」が江戸城在府の際、東国より「狛獅子」を贈ったことが記され、この頃の建立と考えられている。

本殿足元廻りは、現状では砂岩切石を布基礎状に並べて基壇石とし、その上に土台を置き柱を立てている。しかし柱下端部は悉く切断されており、また基壇石の下部には礎石らしき石が残されていることから、当初は礎石立ちの建物であったろうと考えられていた。今回、基壇石据え直しの際に確認したところ、礎石と思われる石の上面の数カ所に、真墨及び丸柱の痕跡が発見され、独立柱・礎石立ちの建物であったことが確認できた。

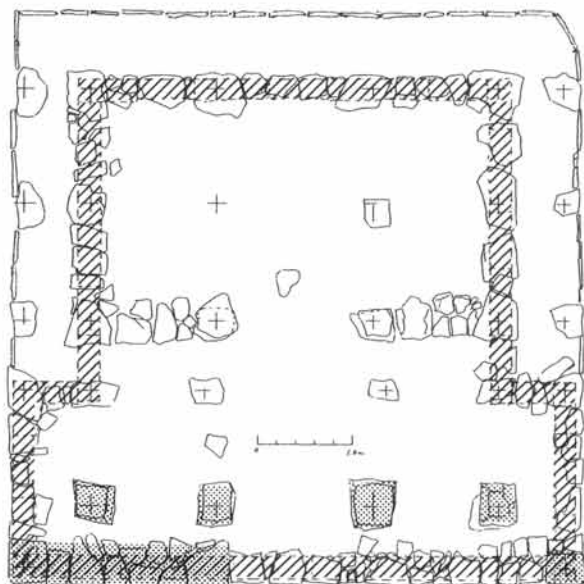
当初の礎石立ちから、現状の基壇石と土台の形式に変更された時期については不明である。基壇石下部の込み石に「寛文十（1670）□」、また浜縁下の礎石上に置かれた大きな込み石に「吉祥日」等の陰刻があり、同じ大きな石碑のような石を割って使用したと考えられ、それ以降の、同時期の施工であろうと推察できた。当初の地盤と礎石は、南西に向かうに従って沈下量が大きくなっているため、こうした不陸を是正するための修理であったようである。しかし現状では基壇石の通りはかなり悪くなっており、建物へ及ぼす影響も著しくなっていた。（鈴木 徳子）



柱下端部の切断 右端は切片が残る



基礎 足元廻りの解体の状況
後方より前方を見る



基礎 基壇石・礎石の状況（手前が南正面）

白抜きは当初、アミ掛けは「寛文十」の陰刻のある込み石と同一・同時期と見られるもの。
斜線は基壇石（砂岩切石、布基礎状）。

史跡和歌山城 御橋廊下復元設計

史跡和歌山城は、天正13年（1585）羽柴秀長の築城に始まり、慶長5年（1600）に浅野幸長が、続いて元和5年（1619）に徳川頼宣が紀州藩主となって入城し、以後明治まで紀州徳川氏の居城であった。江戸期の建物は岡口門と追廻門が残るだけであるが、大小の天守とそれを繋ぐ多聞櫓で囲まれた本丸部分は昭和33年に再建され、その姿は和歌山の象徴として親しまれている。

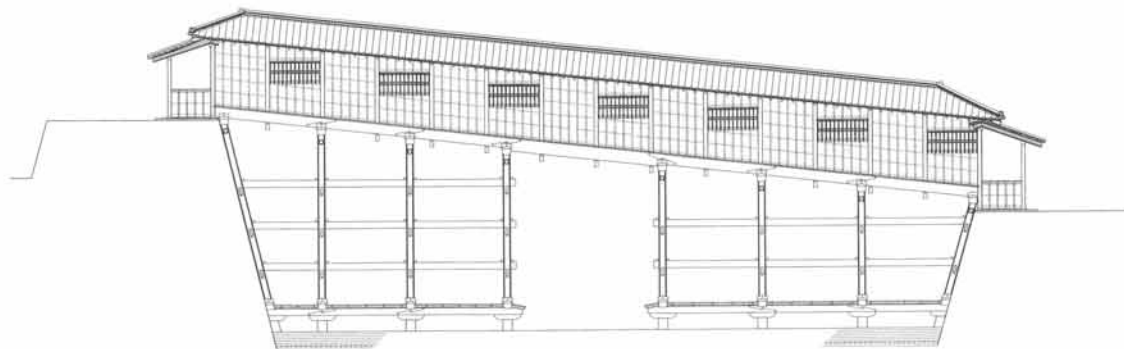
和歌山市では従来より石垣の修復や城内各部の整備を行ってきたが、平成13年度から18年度にかけて実施される「史跡和歌山城 地方拠点史跡等総合整備事業」の一部として二之丸・西之丸の整備とともに、かつて存在していた「御橋廊下」の復元が計画されている。

御橋廊下は、二之丸と西之丸の間の堀に架かる、全長約26.3m、幅2.9mの橋であるが、屋根と壁があり、渡り廊下のようなその形態から、「御橋廊下」と呼ばれたものと思われる。堀水面からの高さは、二之丸側で7.5m、西之丸側で4.1mである。屋根が懸けられ、なおかつ、斜めに取り付く橋は他に類例はなく珍しい。

「御橋廊下」は、藩主の私的空間であった二之丸御殿の大奥から、西之丸御殿や紅葉谷庭園へ至る、藩主専用の廊下橋である。来歴はあまり明確でないが、頼宣が西之丸へ隠居した寛文7年（1667）頃に架橋されたと推定され、その後、掛け替えや火災による再建などが行われ、明治3年の記録を最後に、間もなく破却されたものと思われる。

「御橋廊下差図」という江戸末期頃の詳細な図面が伝わっており、「御橋廊下」の旧状は、それによりかなりの部分が復元できる。また堀底や取り付き部分は平成12年度から発掘調査が断続的に行われており、二之丸側石垣上と堀底で礎石が検出され、更に廊下部の幅は最初は2mであったが後に2.9mに改変されていること等が確認された。

（鳴海 祥博）



「御橋廊下」イメージ図

丸棧瓦の調査中間報告

—和歌山県北西部に分布する特殊な棧瓦—

中筋家主屋の丸棧瓦

現在保存修理工事中の重要文化財旧中筋家住宅主屋は、複雑な形状の屋根を本瓦と棧瓦で葺き分けている。本瓦葺は土間台所部の本屋屋根で使われ、その他大広間や座敷部の屋根は棧瓦葺である。棧瓦は大きな傷みは少なく、建築当初（嘉永5年・1852）と見なせる瓦が、根本的な葺き替えもなく良く残されていた。注目したいのは、使用されている棧瓦の棧部分が、丸みを帯びた独特の形状の瓦であることで、これは当地で「丸棧」と呼称されている。ここでは丸棧について、現時点で判明している事項の中間報告を記す。

丸棧の軒棧瓦には、鬼瓦と同じように家紋が入っており、建築当初では少なくとも役物は中筋家が特注して造っていることが明らかである。当初瓦はていねいに篋で磨かれている。葺いてある部位に応じて丸棧の仕様の変化はないが、補足瓦はいくつかバリエーションが見られた。補足瓦で一番多いのは井戸屋形に葺かれていたもので、「襷瓦十」の刻印があり、当地の襷宜で焼かれた瓦と考えられる。このほかに大広間部の補足瓦には「安原相坂 瓦徳製」の刻印のあるものが相当数あり、また泉州谷川瓦の刻印も1枚だけだが補足瓦として使われていた。

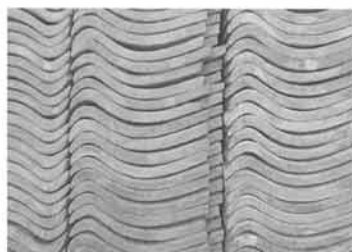
現在も生産される丸棧

ところでこの丸棧は、現在でも細々と造られている。中筋家の南方にある和歌山市の馬場というところに、(有)馬場瓦工業があり、ここで丸棧を造る。この丸棧は中筋家の当初瓦と大きさや形状が良く似ていた。鬼瓦を除いて、役物まで瓦一式を造るが、通常の棧瓦は造っていない。馬場瓦工業は「瓦利」の屋号で、これは「瓦徳」でやっていた前田家を、100年ほど前に馬場家が設備一式を引き継いだという。詳細には見ていないが、手作業で製作していた時代の瓦の型も、屋根裏に多数積み上げてあった。ちなみにこの瓦徳は、前述の中筋家補足瓦の刻印そのものである。馬場家では45年程前に製造を機械化した。丸棧を造るのみならず、職人もかかえて施工まで行っている。月に製造と施工合わせて4～5万枚の規模であるという。

丸棧のいわれや、普通の棧瓦との違いについて聞いたが、明快な答えはなかった。普通の棧瓦に比べて風に強いといい、かつては2割ほど高価であった。どちらかというと、立派な普請の家で葺いたという。馬場家近隣や有田地方の水尻で、丸棧を製造していた瓦工場があったが、これらはすでに廃業し、馬場家は和歌山では最後の丸棧製瓦業者であるという。



旧中筋家住宅の複雑な屋根は大半が丸棧で葺かれている



旧中筋家住宅の丸棧



中筋家の丸棧（上）と馬場瓦工業の丸棧（下）

周辺の状況

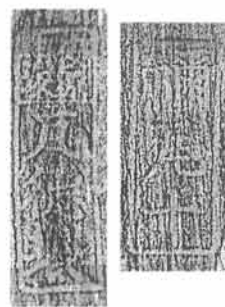
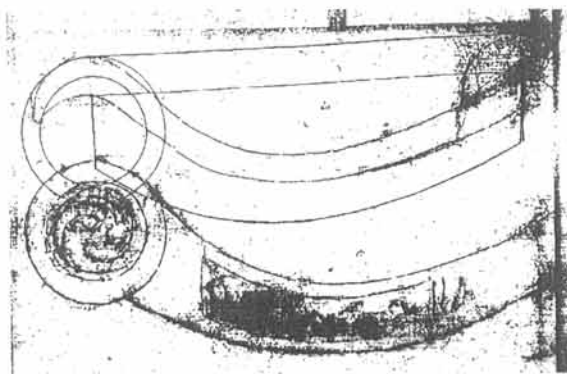
丸棧瓦は旧中筋家住宅周辺においても散見することができる。中筋家西側の隣家主屋や和佐郵便局南東隣の家などがそれである。しかしながら地域の特徴というほどには当たり前多用されているわけではなく、家によって選択的に使用されているようである。分布の範囲は定かではないが、10kmほど遠方の川辺でも見ることができるし、和歌浦でも同様である。しかしながら分布を注意深くみても、紀ノ川流域は和歌山市域に限られているようで、以東の粉河町や橋本市などでは使われていない。なお実見していないが、有田郡吉備町にも丸棧が多く見られるという。これは馬場氏の話にあった有田の製瓦業者の手によるものかも知れない。

管見ではあるが丸棧が使われている建物を見ると、小屋や土蔵などの付属屋にはあまり使われておらず、主に主屋建築や離れ座敷で使用されている。建物は近代の比較的新しいものが多く、大正から昭和期のものばかりであるように見受けられる。

紀州藩と丸棧

丸棧は紀州藩関係の遺構にも使用されたことが確認できる。例えば現在移築工事中の湊御殿（天保4年再建、和歌山市指定文化財）や、幕末期の養翠園の建物に丸棧が見られるのである。また和歌山城御橋廊下の発掘調査でも丸棧が出土した。注目したいのは天保11年（1840）に、江戸に建てられた紀州藩赤坂藩邸の図面（松田茂樹氏旧蔵）にも、丸棧の原寸図が描かれている点である。ここから紀州藩が江戸においてもなお、独特の形状の棧瓦を意識的に用いていたことがわかるのである。

今後は引き続いて瓦屋馬場家の瓦型の調査を行いたい。また紀州藩御殿建築遺構の検討を進め、分布域調査と合わせて、丸棧の位置づけとそれが中筋家で使われた意味を考察したい。（御船 達雄）

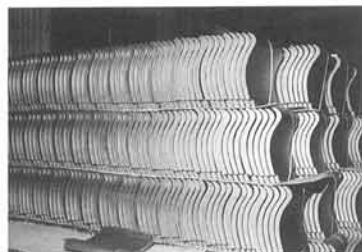


←旧中筋家住宅の
補足瓦に見られる刻印
安原相坂 瓦徳製（左）
襦瓦十（右）

←天保11年の紀州藩赤坂藩邸の図面に描かれた丸棧



馬場瓦工業に残る丸棧の木型



現在も製造される丸棧



旧中筋家住宅の隣家も丸棧で葺く

(財)和歌山県文化財センター平成14年度概要

I 受託事業

埋蔵文化財発掘調査受託事業 11件 文化財建造物保存修理設計監理事業 11件
埋蔵文化財遺物整理等受託事業 4件

II 会議等

理事会・ 評議員会等	理事会・評議員会	平成13年4月27日(金)	文化財センター事務局
	理事会	平成13年5月13日(月)	文化財センター事務局
	役員会・評議員会	平成14年7月3日(水)	アパローム紀の国
	理事会	平成14年11月15日(金)	文化財センター事務局
	理事会・評議員会	平成15年3月13日(木)	県民文化会館
全国埋蔵文化財法人連絡協議会関係		文化財建造物関係	
(1) 総会	6/13-14	栃木県藤原町	(1) 建造物保存修理事業監督者会議 4/15 東京都
(2) 研修会	10/17-18	石川県金沢市	(2) 建造物保存事業幹部技術者研修会 4/16 東京都
(3) 近畿ブロック会議	2/28	大阪府大阪市	(3) 建造物修理主任技術者講習会 8/26-9/3 東京都
(4) 近畿ブロック事務担当者会議	10/11	和歌山市	(4) 建造物保存事業主任技術者等連絡協議会 10/15 東京都
(5) 近畿ブロック主催者会議	8/23	京都府向日市	(5) 建造物保存事業主任技術者研修会 10/16-17 東京都
(6) 第1回OA委員会	2/14	京都府長岡京市	(6) 建造物保存事業中堅技術者研修会 7/15-17 兵庫県加西市
第2回OA委員会	6/7	京都府京都市	建造物保存事業中堅技術者研修会 7/22-24 山梨県東山梨郡
第3回OA委員会	10/11	京都府京都市	
(7) 近畿ブロック研修会	3/7	滋賀県大津市	
	10/30	大阪府枚方市	

III 普及事業

速報展	「紀州の歩み」第12回速報展 第5回巡回展	11/16-12/1	吉備町教育委員会 共催	吉備ドーム
	関連講座	11/6	「有田川流域の原始から古代」(小賀直樹)	吉備ドーム
		11/23	「建物の修理で後世に伝えるものとは」(御船達雄)	
		11/23	「吉備町の奈良時代」(井石好裕)	
現地説明会	北馬場遺跡発掘調査	7/11	(財)和歌山県文化財センター 主催	橋本市 北馬場地内
	大塚遺跡発掘調査	11/10	(財)和歌山県文化財センター 主催	南部町 東吉田地内
	磯の浦古墳群発掘調査	2/22	(財)和歌山県文化財センター 主催	和歌山市 本脇地内
考古学講座	「渡来文化の受容」 「弥生時代の和歌山」 「海に生業を求めた人々」 「和歌山県における後期古墳時代の集団関係」 「南部町・南部川村徳蔵地区遺跡」 「弥生時代～古墳時代の集落の動態」 「根来寺の成立と展開」 「近世の溶解炉」 「土器が語る和歌山県通史」	富加見泰彦 7/27 土井 孝之 8/24 富加見泰彦 9/28 黒石 哲夫 10/26 渋谷 高秀 11/30 藤井 幸司 12/21 村田 弘 1/25 佐伯 和也 2/22 丹野 拓 3/22	文化財センター海南整理事務所	

IV 現地見学・講師派遣など

埋蔵文化財関係		文化財建造物関係	
5/1	吉備町藤並小学校6年生社会科 講師:藤井幸司	10/4	旧中筋家住宅修理現場見学 - 田辺市三栖公民館
5/11	日本史研究会 「中世紀南の開発と交流」(京都市・土井孝之)	11/2	旧中筋家住宅長屋蔵上棟に伴う地元住民見学会
5/20	南部川村清川小学校 総合学習 徳蔵地区遺跡発掘調査現場見学 (黒石哲夫)	11/3	紀伊風土記の丘民家説明会
6/13	福岡県甘木市高齢者大学 講師:富加見泰彦	11/22	旧中筋家住宅修理現場見学 - 大阪市立大学 (谷直樹氏ほか)
7/5	社団法人 地盤工学会関西支部 「徳蔵地区遺跡の説明と見学会」 講師:渋谷高秀	12/7	旧中筋家住宅修理現場見学 - 大阪市立住まいのミュージアム ボランティアグループ
7/13	和歌山県文化財研究会 「南部郷の歴史を探る」 (土井孝之)	12/7	旧中筋家住宅修理現場見学 - 大阪府立文化財センター友の会
7/30	野上町立中学校1年生総合学習 講師:土井孝之・黒石哲夫	12/8	和歌山県立博物館講座 「橋本市の歴史的町並み」 講師:御船達雄
10/10	南部町立南部小学校 6年生総合学習 「大塚遺跡の見学」 (村田弘)		

V (財)和歌山県文化財センター組織表

理事長 1名	理事 6名	事務局長	事務局次長	管理課 (4名) 埋蔵文化財課 (12名) 文化財建造物課 (5名) 文化財専門員 (1名)
副理事長 2名	評議員 14名	(専務理事兼務)	(2名)	
専務理事 1名	監事 2名			

VI 職員名簿

事務局長		岩橋 駿	埋蔵文化財課	副主査	黒石 哲夫
事務局次長		松田 正昭		技師	藤井 幸司
事務局次長		篠原 隆		技師	丹野 拓
文化財専門員		富加見 泰彦		専門調査員	三浦 基行
管理課	課長	西本 悦子	専門調査員	齋藤 有美	
	副主査	松尾 克人	専門調査員	藤村 瑞穂	
	主事	出口 由香子	専門調査員	山野 晃司	
	嘱託	奥出 麗子	調査補佐員		
埋蔵文化財課	課長	渋谷 高秀	文化財建造物課	課長	鳴海 祥博
	主任	土井 孝之		副主査	寺本 就一
	主任	井石 好裕		副主査	多井 忠嗣
	主任	村田 弘		技師	鈴木 徳子
	主任	佐伯 和也		技師	御船 達雄

(財)和歌山県文化財センター年報

2002

2003年5月

編集

財団法人 和歌山県文化財センター

発行

(担当 村田 弘/寺本就一)

印刷 西岡総合印刷株式会社